

## 令和 2 年度第 3 回社会教育委員会議事録

### 第 3 回社会教育委員会議概要

○開催日時 令和 2 年 10 月 5 日（月）13 時 30 分～16 時 30 分

○開催場所 舞鶴市大会議室

○出席委員 江上委員、大泉委員、龜井委員、川上委員、田中委員、谷口委員、畠中委員  
福原委員、藤村委員 計 9 名

○事務局等 市民文化環境部藤崎部長、公民館担当村尾課長、中公民館館長、西公民館館長、南公民館館長、城南会館館長、加佐公民館館長、東公民館館長、大浦会館館長、生涯学習支援係佐藤係長、秋本

### 1. 挨拶 会長

### 2. 報告事項説明

京都府社会教育連絡協議会総会について

→書面により開催され、決議された

近畿大会の舞鶴市の発表内容について

→大泉委員より城北中学校のアサギマダラの活動について報告

### 3. 議題

#### ①集いの場のあり方について

前回の意見の取りまとめを事務局より説明

→追加、修正の意見なし。

#### ②仕掛けづくりの方向性について

福原 自身の普段の活動に対する思い、大切にしていることに対して意見を。

田中 文化協会は 75 周年で以前からやってきたことをそのまま継続している事業がある。それはやらないといけない、今まで行ってきたことを変えるのは怖いという思いで続けている。毎年同じ技術、事業等を行っているとお客様からしたらあきるかもしれないが、伝統は続けていきたい。少しずつ今の時代にあった事業に講座を変えたいと考えていた時にコロナで大きく状況が変わった。このコロナがイベントを変えるきっかけになるのではないか。イベントの視点を少しでも変えていければと職員同士で話しながら、同じ方向を向くことができた。

大正琴の講座は大正琴を媒体に仲間になった人が多い。大正琴を弾きたくて入ったのは 2 割、友達作り、遊び場づくりにはいった人がほとんど。なるべく期待にそえるような楽しい講座をしたい。以前 3 つの小学校に大正琴の指導にいった。将来子どもたちが、こんな楽器聞いたことあると興味をもってもらえるきっかけになればと思いながら指導した。自分自身小さいころから音楽に触れあえ、楽器ができて良かったと思い、今の児童にも同じような経験をしてもらいたい。

畠中 近所の方が認知症で行方不明になった。仕事を休み、いろんなどを地域全体で探し、四日目に見つかった。普段よく関わっている方ではなく祭りで顔を見る程度だったが、近所の方ということだ

けで地域の人が集まっていた。そこに地域力があると感じた。探している方々は同じ地域の人というだけで、かわいそうだからと人が集まった。近隣が集まるのは、お祭りだけではなく同じ地域の方を探すようなこともあると感じた。

幼稚園では感染予防しながら仲良くすることが難しいが、こんな状況の中でも気を付けていることは楽しい思い出を作ること。以前、小学生と芋ほり体験をした。今までは、幼稚園だけでできることをしていたが、外部と協力するようなイベントを開催した。今のうちに多世代と協力することを経験すると、困ったときに助け合える、自分の必要性があった時には集まれる、そんな大人になれると思う。だから、こんな時代だけど人とのつながりは大事にしていきたいし、将来的には、地域力をもった大人に成長してほしい。

藤村 自分が子供を育てようとしたとき周りに誰もいなかったので手探り状態で子育てをしていた。自分の親は近くにいたが世代が違い子育ても違ったので、同世代の友達が欲しかった。私はその時辛かったので、同じような環境で子育てしている親はつらいと思い、まずは寄り添うことを大切にしている。幼稚園で働いていた時に、そんな親が少しでも外出し、親同士の関わり合いがあれば救われると思った人に声をかけて幼稚園で園児と乳児と親が交流できるスペースを設けた。これをきっかけにつなげることができ、参加した乳児が朝来幼稚園に入園し、親同士のグループが出来上がった。ひとつの交流が良いサイクルになった例。自分の失敗から学んだことが人のためになり、心細い親を減らせることができ嬉しかった。その時に「ありがとう」と言ってくれたことで、自分のやる気にもつながりこれからも頑張ろうと思えた。これも協力者がいたことだが、成功してよかった。参加者が良いサイクルにはまり、今後楽しく子育てや交流が出来たらよい。

川上 青葉山ろく公園に5年生が野外活動で来られた。先生の中にも一緒に遊ぶ先生や隅で様子を見ている先生など、いろんなひとがいた。このようなイベントは、小さい頃の思い出作りになっている。思い出作りの大事な時期を感染予防で中止ばかりでいいのかと感じている。今年は、運動会に親が見に行けなかったり、児童の野球大会も減少し、これでは今の思い出作りに影響してくるのではないか。仕方のないことだが、そこまで中止にする必要があるのか、他に方法はないのか考えている。

指導者の立場に立った時に、今の指導と昔はかなり違っていると思う。昔は周りのプレーをみて覚えるという指導が多かったが、今は違う。その現状を活動のリーダーや指導者は知っているのか、指導者が学ぶ学習の場がない。だから、高齢の方が学童で児童の指導をするときは、その方に研修を受けてもらうことが必要なのではないか。

指導者には今の指導方法が適切であるのか学んでもらい、参加者の大切な思い出作りのきっかけを作れるようにしてほしい。

亀井 普段の活動で大切にしていることは学校内のこと。大浦地区では、統合でひとつの学校ができた。地域の方にとって子供の声はエネルギーになることが多く、地域で子供の声が聞こえなくなるのは寂しいが、子供のために統合を決断したという言葉が印象的だった。統合すると以前のように学校生活から子供の声を届けることができないので、敬老会で統合前の小学校の校歌を歌ったり、地域のイベントに参加しながら地域の方に声を届ければよいなと感じている。地元の方からは、通っていた学校はなくなったが、いまでも校歌が聞けると喜んでもらった。子供にとっても地域の方と交流できることは良いことだし、子どもの声から地域の方を元気にできる学校づくりをしてい

きたいと思っている。

学校の授業では、教科の目的をしっかりさせないとイベントでも実施することが難しい。常に狙いを持ちながら地域とつながるのは難しいから、地域が開催しているイベントに参加することが良いと感じた。大森神社でのどんど焼きに参加した児童の感想を聞くだけでも良いと思っている。最近では、児童に先生になって舞鶴に戻ってきて一緒に働こうと約束している。教師が不足して人を増やしたいと思ってもいるが、いまの児童に教師がブラックでおもしろくない仕事と思われるのは残念だから声掛けを続けている。一緒に先生になって地域の方を元気にしたいと思える子を育てていきたい。

私が言われて嬉しかった言葉は、地域の方に子どもたちのおかげで元気になったといってもらえたこと。子供と一緒に地域を盛り上げようといってもらえること。

大泉 小さな町内で、子供の人数が少なく寂しいのでこれからは大人といっしょにラジオ体操をしようとして参加させた。福井小学校ではみんなに出番があるように配慮してくれているが、少し障害があってもなかなかうまくいかない子がいると聞き、どうにかさせてあげたいと思ってラジオ体操で学年ごとに役割を与えた。学校では出番がない子でも地域では役割があると参加するのも楽しく積極的になる。また、地域の大人が役割を果たせた子どもを元気にほめる。そうやって子供たち主体のイベントが継続できるようにできたら良いなと考えている。

継続することで、将来龜井先生のように地元にかえって先生になりたい、地元のために何かしたいと思える子を育てられると考えている。

江上 人を集めるとき、私たちは学生をどう集めるかが問題になってくる。ひとを集める入口に学生にとってメリットが明確か、楽しいか、学びがあるかなどが大事。とりあえず若い人が来てほしいと言われることがあるがそれでは学生を集められないので、参加する学生にとって、メリットがあるかが最初の一步だと思っている。だから人を集めるときは、参加する人にとってメリットが明確か、アクセスが対応可能かどうかを考えないといけない。最近ではコロナで、アクセスチャンネルが変化した。オンラインで授業などができるようになり、参加者のハードルが下がっていると感じる。子育て中の親のようにオンラインだから参加できる方が増え、逆に参加者が増えることもあった。参加の仕方を多様化することが大切と感じた。

継続するかのところで学生のサークルが代表的。学生のサークルは続く続かないが大きい。先輩のいない仲良しグループで作ったサークルは続かない。中心になる優秀な学生がいたら大きなことをするが、そこが卒業すると無くなる。継続させるには、頼りなくても下の方に権限を引き継ぐことも大切ではないか。学生の活動で印象的だったことは、福知山城のプログラミングのライトアップ事業。中心の子に先生からやってみないかと権限を与えた。そこから、その子が中心となってTwitterなどで人を集め、1年生中心の学生が8月頭に集まり10月に実施した。権限、資金を全部学生に渡した。その時、自由に任せるのも大切と感じた。

谷口 普段の活動は何をしているのかと聞かれると最初に当事者主体の子育て支援をしていると答えている。私が初めて親となった時、私とこの子の友達を探すところから始まった。当時は親のリフレッシュの子育てサービスが出始めたころで、サービスが貴重でありがたかったので参加したが、〇〇ままとしか呼ばれなかった。今まで働いていた時は一人前に扱われていたが、慣れない子育て中に、一人の大人として扱われなくなった。当時は仕方がないことと思っていたが違う。子育て中の

親だから感じる想いがあり、それを周りに伝えることができたならこの環境も変えていけると感じ、現在の活動を始めた。当事者の思いを形にしていく子育て支援をしたい。当事者はサービスの受け手で、子育て中の親は守らないと、支えないとではない。子供をつれて働く姿は親しかみせれない、親だからできること、大人として扱えることはあるので、地域の子育て中の親ができることから地域にアクセスする。地域に役立てることを親となった人の育てなおし、気づきなおしのきっかけの場を提供できれば良い。だから、メニューは1時間2時間で、そのあとの22時間は考え方が変わっているようなものを開催できるように目指している。

最近、子育て支援はいろいろあるが出産や産後で疲れている方が多く、自分でも人の役に立てると感じれる人が少なくなり、アプローチできる方が減っていると感じる。地域中のそんな親を元気にできれば地域も変わるんじゃないか。相談する側される側の両方を経験することで、お互いの気持ちを理解することができ、相互の経験で地域に戻った時に助け合いができるようになってほしい。

福原 普段の役員会ではみんなの意見を聞くことに気を付けている。みんながやりたいことができるように心がけている。印象的だったのが、PTAに参加した時、会長一人でやっている雰囲気、周りにはなにかやっている程度にしか思わず関係ないと逃げるように避けることがあった。自分が会長をしたときは下からやりたいことを多く言われ、楽な方向に改善できないかのような内容が多かった気がする。PTAは先生と保護者をつなぐ一番大切な組織だと思っている。だからPTAでは調整が大事で、自分が役をやるときは多くの人意見を聞きながら学校との調整ができる人になりたい。他にも、地域の活動について任せられることがあるが、その時は権限をすべてもらうことにしている。任せるのなら、お金と権限も任せてくれないと変えたくてもどうにもできない。今まで通りでも良いが、マンネリ化で面白くなく、時代にあってないことがある。みんなの意見を聞きながら少しずつとりいれて自分が役になったときは、少しでも変えられるように気を付けている。すべての根底には、ひとの笑顔をみることが好きということがあり、意識して取り組んでいる。音楽をやっているとき打楽器を担当しているが、打楽器は音符がなく管楽器が演奏しやすいように、リズムを刻む役割がある。一発大きな音を出すときは、目立ち、そこで雰囲気が変わることが多い。組織では、リーダーの一言で雰囲気が変わることも多いので気を付けながら意見を聞くようにしている

畠中 亀井先生の話から反省した。元気な声を地域に届けることは大事なことだが、今はコロナですべてが縮小傾向で、自分の村も縮小している。敬老会は商品券を配ることになっているが、本当にそれでいいのか疑問が残った。地域行事や公民館とかも縮小などしていると思うがそれではいけない。人口が減り、地域が縮小しているからこそ地元の子供や元気な人の声をもっと届けたいといけないと亀井先生の話で気づかされた。来年から敬老会などでもっと地域の声を届けられるように考えたい。

藤村 田中委員の大正琴サークルに質問。サークルの人数は男性が多いか、女性が多いか。

田中 男性は2人、圧倒的に女性が多い。男性2人は大正琴をやりたいから入っている。最初は、女性の数に驚いていたが、大正琴をやりたいので頑張っている。

藤村 男性は目的をもってやる、女性は友達作りが多い。

田中 音楽が好きというサークルに入る共通点は同じだが、女性は友達作りで入っている雰囲気はある。でも最終的には音楽が好きということは変わらない。

川上 亀井先生の話から気になることがある。社会教育でも学校教育でも授業や体験を行う際には、立案実行がしっかりないといけないという話があった。ある程度考えないといけないという発想は高齢者が多いイメージがあるが若者は違う。若い人の指導者がなかなか生まれない原因は、現在の組織がわからなかったり、しっかりとした目的がないと組織の中に入れないという考えがあるのかなと感じた。若い人の指導者を育てるにはそのあたりを今後考えていけたらと感じる。

(休憩)

福原 公民館事業に対してどのように思っているのか意見を。

前羽 公民館では経験的な話をしていく。亀井委員の舞鶴に帰ってきてほしいという話や、江口委員のメリットがないと参加しないという話が参考になった。

公民館事業では、コロナで縮小しても今後も続けられるように考えている。公民館は若い人がつながりたいときにつながれたらいいと思っている。南公民館は高齢化で若い人が不足し、イベントの継続が難しくなっている。

若者が舞鶴に帰るかどうかの選択の時に、舞鶴が選択肢に浮かぶかどうかがある。浮かぶ、浮かばないの差は子どもの頃の地域活動での思い出の差だと思う。若者離れを防ぐためにも公民館では実際に経験して思い出に残るようなことをしっかり行いたい。実際に参加することも必要だが、リモートも良いと最近感じた。今度、倉梯小学校の運動会の中継を行う。コロナで縮小版となり参加できなくなった祖父母の方が見に来る予定。リモートでも、近所の人に気軽に使ってもらえるきっかけが作れた。

有本 経験は少ないが、これからの社会で人生 100 年時代と言われているので、高齢者を地域でどのように支えるかが大切であると考えている。地域包括ケアで公民館はどういう役割が必要か考えているが、中舞鶴の団体には子育てに力を入れてほしいといわれる。公民館でもその力になりたいと思っている。公民館で子育て事業や、自然体験をすると多くの子供が参加する。少子化の中でも親はどんなことも子供に経験させたいという思うのが強いのかなと感じた。生涯教育も大切と思うが、子どもへの支援が必要でこれからの館の方向性になると考えている。

森下 公民館ではどんな事業が必要なのか難しい。いろんな人と会話しながら今何が必要かアンテナを張っておかないといけないと思っている。ネットでよその公民館がどんなものか調べたが、皆さんがおっしゃっていたこととほとんど同じだった。公民館の知識を様々なところから取り入れて今後の運営の参考にしていきたいと思っている。

今後、自分が知りたいこと、地域の方が知りたいことをどんどん広げ、時代のニーズに応じた事業を考えていく。そして、参加者にはたくさんの経験をさせてあげたい。

岸本 半年経って思ったことは、どこの公民館もやっていることは似ている。公民館講座は趣味、歴史、健康など講師の話聞くだけで終わる完結型が多い。公民館講座が完結型になりやすいのは仕方がないが、本当は継続性のある事業がしたいと考えている。西公民館は規模が大きく、南公民館の南自治連会のような地元と連携のとれるような団体が無いので継続して行う事業の開催が難しい。でも来年の講座では連携講座を増やしたいと思う。西公民館の近くには、国際交流、郷土資料館、田辺城など連携できる施設があるので、各施設が連携できるようにコーディネートの役割を公民

館にできたらいいと思う。

西野 城南会館は地域と連携できる城南サバイバル、ふれあいサンデー、もちつき大会の三大事業がある。餅つき以外中止が決まっているが、今年コロナで全部中止になると各講座事業だけになってしまい寂しいし、地域のふれあいの場を提供できなくなる。事業のお手伝いから地域とふれあえることができ喜びを感じるとおしゃっている地域の方がいて印象的だったので、ふれあいの場の提供は大事にしていきたい。

加佐公民館でもそうだが、城南でもミーモの実証実験をしている。地域の方がやっているがスマホに慣れていなくて障害になり、実証実験に参加できないことが多い。だからスマホの事業を公民館でできないかと考えている。あと10年も経てば、みんな利用できると思うので必要ないが今は慣れてもらうことが大切だと思う。

男性、小さい子供の親、30代40代の働き盛りの講座が少なく、あまり使用してもらえていないと感じる。

森川 今年の講座は去年の流れで行っているが気になることが3点ある。

1点目、現在開催している講座は大浦の方の参加が少ないこと。ほとんど大浦以外の方が利用しているので、それはどうかと思う。

2点目、地域と会館のつながりを大切にしていること。大浦振興協議会とは10年後の大浦を考える夢プロジェクトに参加している。大浦女性の会ではお出かけ向日葵のお手伝いなどしているが、会員からは参加できて良かった、やりがいがあると聞いている。老人クラブは地域の字ごとのクラブがあるところはしっかりしているが、無くなっているところは参加が少ない。ただ公民館講座に参加してもらっている方もいるのでお話をしたときは、自分が住んでいる地域の知らない部分が多いことを知った。各地域の神社の写真を撮って回ったり、きれいな風景が見えるところに行ったりなど教えてもらったところ実際にしている。地域とはそんな繋がりを大切にしている。

3点目、消防が前職だが会館利用者が倒れても助けられるか不安があること。会館を運営する職員ならそこが大切で訓練必要だと思う。

澤田 加佐公民館でもお年寄りの講座の利用が少ない。プラスアルファあることがこれからの講座に必要だと思う。今度マイナンバーの出張受付ができる。これは予約が多く関心のあることはお年寄りでも参加するんだなと感じた。この事業の時は、プラスアルファにカードを作ったらまたマイナポイントの5000ポイントのつけ方を教えるつもりだ。

ふれあいサンデーの展示会は中止になったが公民館の作品展と展示を一緒にできないかと考えている。写真展と講座の展示会プラスアルファ職員で餅つきなど考えている

福原 先ほどの集いに合わせて楽しかったこと、反省点について意見を。

田中 2020年10月4日総合文化祭の一日目で、イベントの途中で出演予定もあったのに帰ってしまった団体がいて優しく伝えたつもりだったが、うまく伝えられなかったことがあり反省した。その時、言葉や伝え方は大事だと感じた。嬉しかったことはイベントを半年ぶりに開催できたこと。イベントはお互いの協力がないと成立しないが、うまく協力でき無事できた。公民館のちょっとコンサートは30分の短い時間だがお客さんも楽しそうに聞き、出演者も半年ぶりの発表でいきいきとしておられて良かった。

畠中 うまくいかなかったことは、カブトムシの幼虫を使ってかぶとむしの館をつくったとき人集めが

できなかった。募集したが、参加してくれたのは園児の保護者のみでほかの園の子は来なかった。カブトムシの戦いなどなかなか見れないし、せっかくだったのでたくさんの子に見せたかったが、自分の幼稚園じゃないからこなかったのかわからないが参加者が少なくて残念だった。

楽しかった雰囲気は、近くの郵便局長との関わり。郵便局長が女性から男性に変わり男性だから最初は距離を感じていた。でも利用すると、今までの雰囲気とは違い、いつも元気に挨拶をしてくれる。明るく声をかけてくれるとこっちも嬉しいしテンションが上がる。だから主催者側も明るく元気よく参加すると、参加者も気分が良くなると思ったので主催者側として気を付けようと思う。

藤村 畠中委員に付け加えると自分が元気なくてもスーパーのレジの方が元気よかったらハツとし、また並ぼうと思うが、悪かったらもう並ばない。人と人との関係が大切だと思う。公民館でも同じと思うが窓口の人に元気に声を掛けられるとまたいってみようと思うので、職員はそこを意識するべきだと思う。公民館では人と人とのつながりのきっかけを提供することが大切と思う。

失敗例にしたくないと思うことに現在しているラジオ体操がある。ラジオ体操は外であるのにどうしてコロナで中止するのかと思ったが、仕方がない。ラジオ体操など親としてはめんどくさい部分もあるが、地域で楽しみにしている人もいてるので、これから縮小せず続けられたら良いと思う。

川上 野外活動では、喜びと悲しみを感じることができる。その野外活動での反省点に参加している子供にうまく声をかけられなかったことがある。声をかけると反応する子とそうでない子がいる。こちらのイメージだけで何度も話し続けると一方的になってしまい、相手をいじめているみたいで会話が成り立たない。うまく伝わらない子にどのように伝えたらいいのか勉強しないと感じた。社会人でもイベントが中止になっているが、団体の連絡不足で行き違いが発生することがある。そこから気分的に楽しくなくなり、これを機に活動がなくなってしまう可能性がある。高齢になってくるという人は言うので心配はないが、こちらのまとめ不足や準備不足があるのかなと反省する。

亀井 今年から小学校でアルミ缶を集めて絵本を買う事業を行っている。回覧や呼びかけで、地域の方にこの事業が広がり多くの方が「良い本を買ってね」とアルミ缶をくれた。児童が通学中に近所のおばちゃんから缶を貰うこともあり、少しでも地域と連携して関われていると思って嬉しかった。あまりうまくいかず失敗したことは、ほたるをいっぱい飛ばして蛍の学校つくる事業をしたこと。ほたるを育てて飛ばそうと始めたが異動したらそのあと続かなかった。自分だけが良いと思ってもだめで地域の方やほかの先生方に協力してもらい、周りの人にやりたいと思ってもらうことが大切だと反省した。

大泉 嬉しかったことはたくさんあった。ラジオ体操をコロナで中止にしている間、今後も継続できるように高齢者世代の方が参加してくれていた人の家を回り、来年も続けられるように話をしてくれた。読書会議でも全員が話しやすい環境を作れている。フジバカマの祭りも多くの方に来てもらい、市外の人と地元の方が交流できた。

困ったことに、後期高齢者はなんでも教えたがる。子供が一生懸命苦労してやっているのを見守ることも大切なのに、やり方が違うとすべて教えたがる。役割じゃないこともすることが高齢者の特徴。他にも、虫の会に参加している事やカメラを趣味にしているなど自慢ばかりの人がアサギマダラを見に来た。マーキングをする時に網で捕まえるのは禁止だが手で捕まえられることを知らず、自慢ばかりなのに何も知らない人がいた。こちらもみんなで楽しく鑑賞会をしたいのに、そんな方が

いたら楽しめない。そんな人を周りが注意できるようにならないといけないと感じた。

江上 良い雰囲気となるためには、ちゃんとしたコミュニケーションがうまれたか、相手にぶつけているだけじゃないか、そういうところが大切。

大講義の満足度は動画の方が高い。生の大講義では講師が離れて小さく見えるため、親近感がわからないが、動画になると講師の顔を見て授業を受けれるため近くに感じる。質問もテキストで答えられることが多く、対面とは違い時間が限られていない。リアル場ではないがそんな風にコミュニケーションがとれたらいい。

地域の方に学生を連れてきてほしいと言われたが、相手の想定より人数が少なくて怒られた。せっかく行ったのに残念だった。相手の事情もあったのかもしれないが、事前にコミュニケーションとれてたらこんなこともなかった。

谷口 集いの場の中では自己紹介を大切にしている。自分の事を話せるようにどんな小さな場面でも時間を作るようにしているが、乳幼児の親は自己紹介の場面で子供の紹介に変わることが多い。自己紹介では相手の話を聞いて対話になるようにしてほしい。相手の考え方を受け入れて、違いを頭ごなしに否定するのではなく、そんな考え方、見方もあるとお互いに受け入れる。お母さんたちの座談会で学生時代のことなど話してもらった。そのときに一人のお母さんが音楽のすごい人だと知り、赤ちゃんのお母さんとしか見てなかったが見方が変わった。音楽のイベントで歌ってもらった。人の意外な面を知り共通点を見つけて話を膨らませたら良い。楽器の練習など子供を連れて行ったらふざけていると思われるんじゃないかと、お母さんになり趣味を辞めた人が多い。子供のペースで続けられることを増やせるようにしたい。

公民館には、カルチャーセンターではなく公民館だからこそこできることは何かを考えながらやってもらいたい。講座は、単なる教室ではなく、集っている場だとアピールが必要だと思う。最近若い方が新しい教室を公民館で開きたいと思っているが、昔から続いている教室のせいで公民館をとれない人が多い。

旧対新で争うのではなくお互いにできることがあると思うので共生できないか。

公民館サービスにはサービスのあちら側こちら側があると思うが、あちら側こちら側で分けずに組み合わせ、ゆるくそちら側にいくときもあればこっちに来るときもあるのように柔軟にできないか。例えば、地域の共生の中で徘徊老人を探す研修に参加し、伊佐津公民館に集まってグループで探しに行った。その時は探すだけでなく、豚汁を作って認知症予防の栄養について教えてもらったり、地域の民生委員さんや保健所の人が集まって話をされたり、一緒にすることで一つの目的だけでなくサブテーマを取り入れたものができた。参加したときに子育て中の親はベビーカーを押しながらお昼散歩しているから、徘徊老人を昼に探しやすいと言ってもらえ嬉しかった。子育て中の親はできないことについて指摘を受けることが多いが、できることを言われると自信につながり、自己肯定感が上がる。このようにゆるく組み合わせていくことでより良いものができると思う。

福原 先ほどの意見に対して公民館から何かあるか。

岸本 社会教育施設の役割は、講座を開催することで果たしているという雰囲気になっている部分がある。公民館は単発の講座が多く、常連の参加や、安いから来るなど社会教育のひとつにうまくなっていないところもみられる。多世代が交わるようにしたいが常連だけで終わりやすく、社会教育

の一つになっているのかわからない。以前開催された人権セミナーで多世代交流のできる焼き芋のはなし聞いて、受講者がいいな、やってみたいとおっしゃられていたことが印象的だったのでそんなことができたら良いと思う。

福原 かけられた言葉で、最後笑顔で「ありがとう」が一番嬉しい。決め事など、自分の意見が取り入れられていると感じれたら嬉しいと思うのでそこは気にして取り組んでいる。

うまくいかなかったことは若いリーダーを育てれないこと。サークルで権限、お金をもらってもどうしていいかわからない子が多い。責任あると辞めておこうとなるので、少しずつでも上手に主導的立場から若い子を育てれるようになりたい。

### ③アンケート調査について

事務局から説明

村尾 人が緩やかにつながる社会で30～50代が参加しにくいことが多いと思う。積極的に参加している人はいままでどんな背景があったのかなど知り、参加したいと思っている方のきっかけづくりに活かさないか、ヒントをいただきたいのでアンケートを実施した。

江上 アンケートの質問について。どんな人が答えたのか、子供の経験が大人の活動にどのような影響を与えたのか。結果等について後日詳しく説明したい。

## 4. その他

### ①京都府社会教育研究大会について

→11/19に開催予定だったが中止。来年度も舞鶴で開催予定。

### ②舞鶴市成人式について

→実施方向だが、内容は工夫する。

成人年齢が20歳から18歳に引き下げられるが舞鶴市では成人式を例年通り20歳で行う。